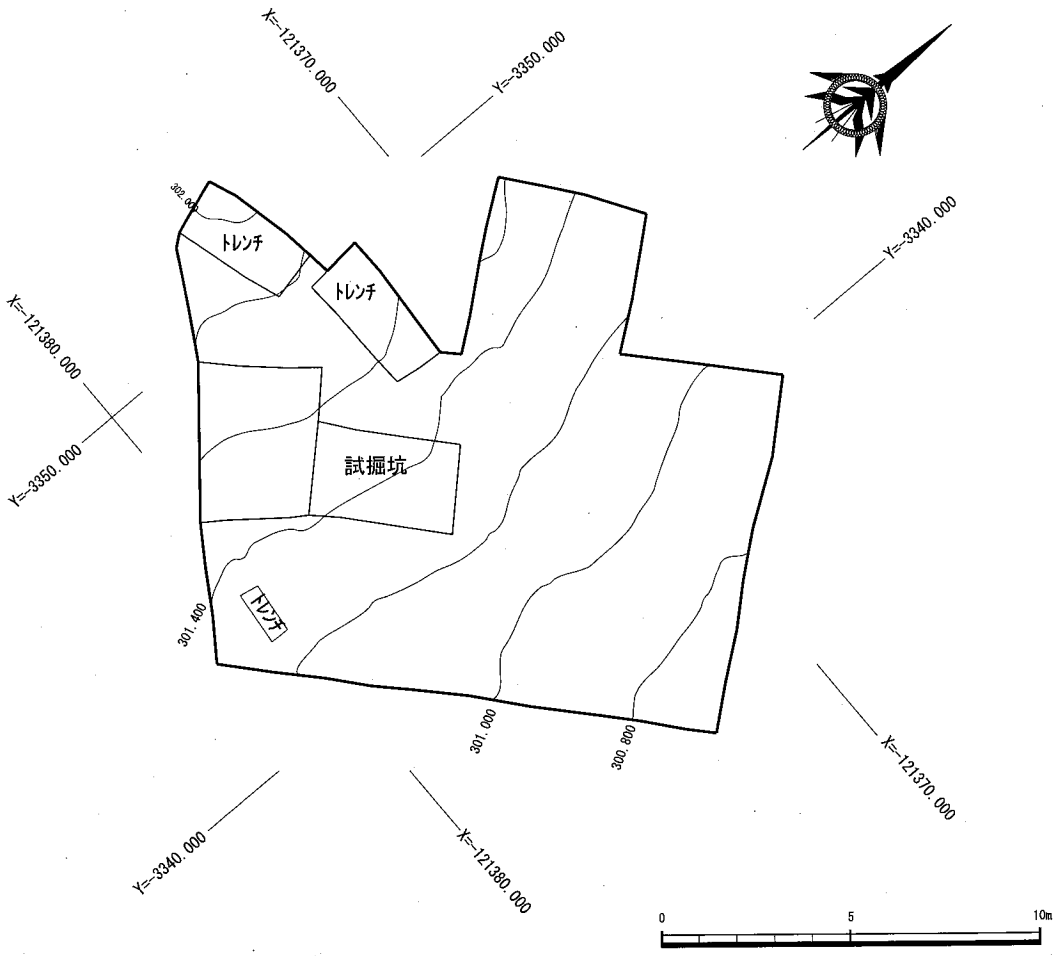
第29図　楢粉山遺跡第Ⅳ層上面地形図

第Ⅲ章　第Ⅳ層での遺構・遺物

第１節　はじめに(第29図)

高原スコリア直下層で陥し穴遺構を検出した後、その周辺部分を残して下層での遺構・遺物の検出にあたった。掘削に際しては、調査区の外周に土砂崩壊防止のための犬走りを設け、トレンチを入れ、層序の検出にあたった。試掘調査の際に遺物が出土した橙色土層に至るまでの土層は、火山灰・無遺物層が中心で、且つ層自体も安定していた。しかし、土質がかなり硬質であったため、作業時間短縮を考慮し、青灰色火山灰層を中心に重機で掘削した。その後人力で掘削し、第Ⅳ層上面で遺構・遺物を検出した。上面層では、古代の畠遺構がＢ２・Ｄ・Ｆ・Ｈ区で検出された。遺物については、Ａ・Ｂ１区は非常に少量であったが、Ｃ～Ｈ区では古代の土師器が比較的多く出土した。特にＣ区では遺構は検出されなかったものの、古代の土師器が大量に出土した。当遺跡における古代土師器出土量の大部分を占めている。しかしながら、多くは細片で図化不可能なものが多いため、図化可能なもののみ実測図で掲載している。なお、器種構成は、土師器は坏・高台付椀・黒色土器Ａ類(坏・高台付椀)・甕、須恵器は甕と壺である。

以下、古代の遺構・遺物について記述する(縄文時代の遺物については次集で考察する)。



第30図　楢粉山遺跡Ａ区第Ⅳ層上面地形図

第２節　各区の出土遺構・遺物(第30～46図)

１　Ａ区の出土遺構・遺物(第30図)

Ａ区では、遺構は検出されていない。遺物については、縄文時代後期と思われる土器及び石器が20点程出土したのみで、古代の遺物については出土しなかった。

２　Ｂ区の出土遺構・遺物(第31～33図)

Ｂ１区では遺構は検出されなかったのに対して、Ｂ２区では調査区全面より畠の畝状遺構が検出された。ほぼ西北西－東南東ライン上に主軸を置いているものの、やや蛇行気味である。幅は約30～40cmで統一されている。

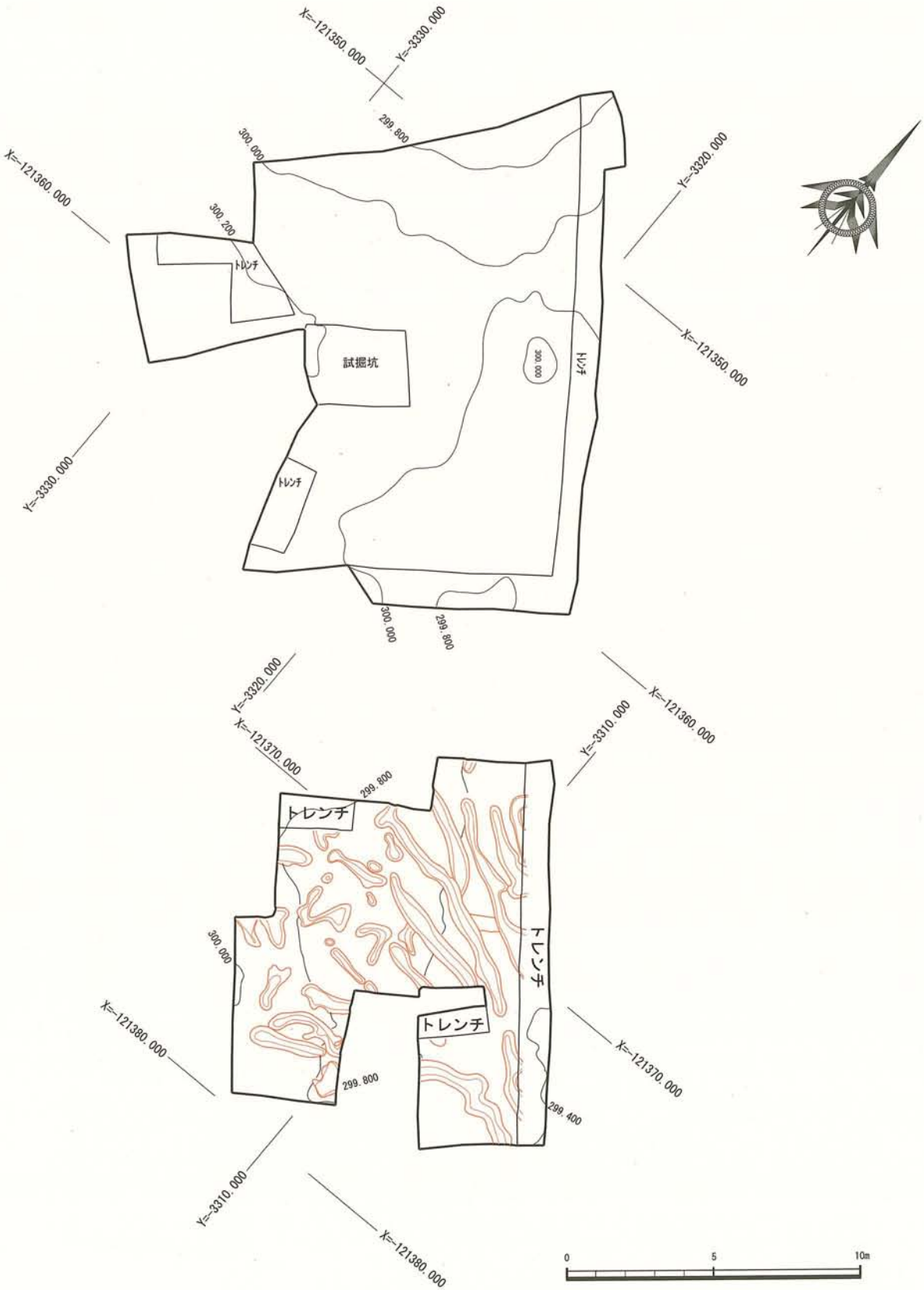
遺物については、Ｂ１区では、Ａ区と同じような状況で、縄文時代後期と思われる土器破片が数点出土したのみである。それに対し、Ｂ２区では約130点の遺物が出土したが、そのうち古代の土器と推定される遺物はわずかであった(１～４)。出土した遺物は、土師器の坏などは少なく、甕の断片等が多かったが、畝の埋土中から高台付椀(３)が出土した。１は坏で、底部端には成形時に付けられたと思われる抉り込みのような傷が付いている。底部はヘラで切り離された後、ナデ整形が見られる。底径5.0cm。２は坏の底部から胴部にかけての断片で、底の切り離し方法は明確でない。３は高台付椀で、胴部下半で膨らみを持ち、胴部が真っ直ぐに立ち上がって口縁部でわずかに外反する。高台は当遺跡の中でも高い方である。口縁部径13.8cm・高台径7.6cm・器高6.9cm。４は甕の口縁部断片である。裏面のヘラ削り等は明確ではなかった。口縁部径15.2cm。

３　Ｃ区の出土遺構・遺物(第34～38図)

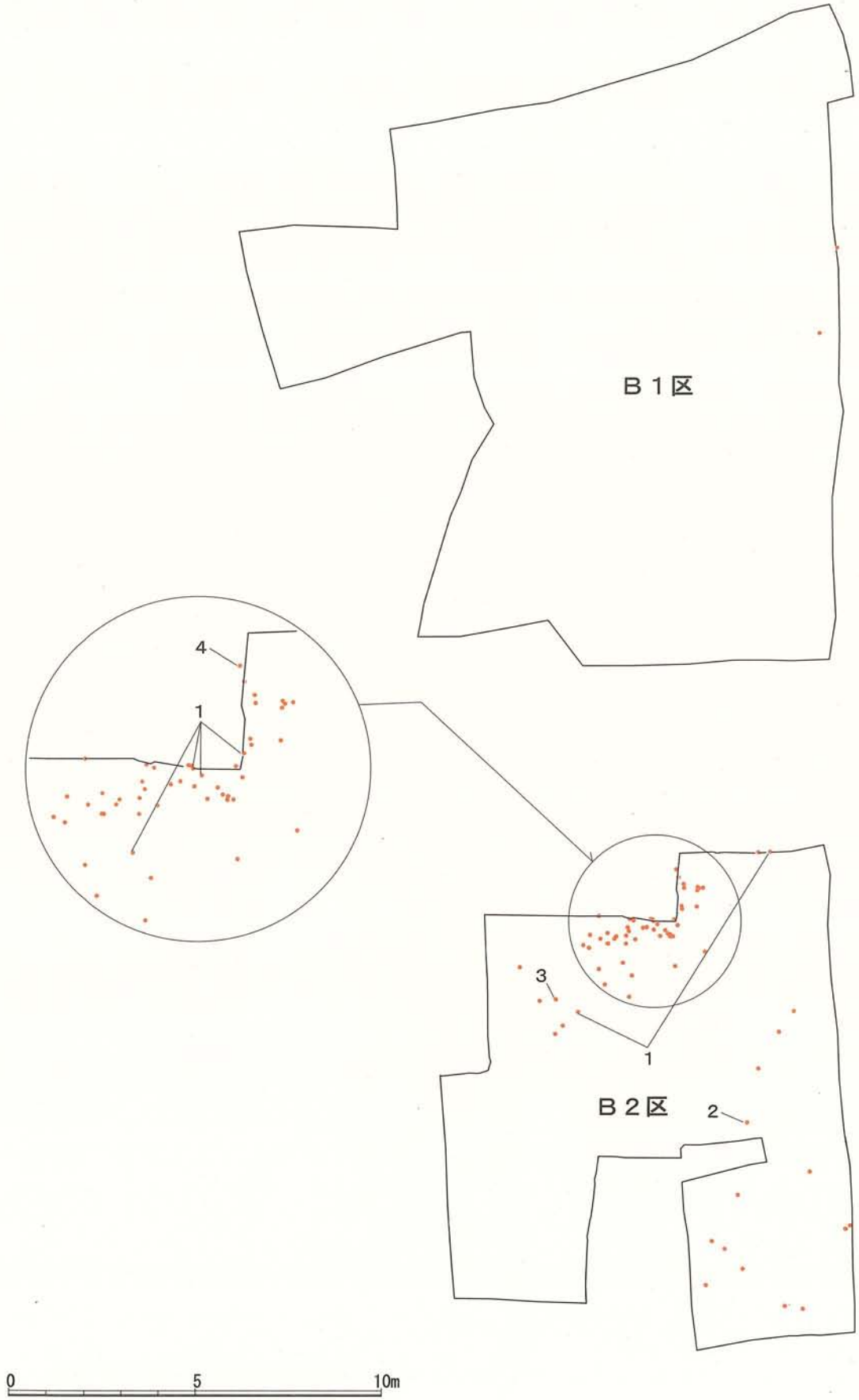
Ｃ区は近年の削平による攪乱を受けており、表土検出時から土師器及び縄文土器が大量に出土した。しかし遺構そのものが検出されておらず、又、倒木等の自然作用により、包含層内で攪乱されたような状態で出土しているため、殆どが小片化し、摩滅しているため、器形を復元できるものはわずかであった。そのうち、図化可能なものは、土師器は坏7点(５～11)・高台付椀2点(12～13)・甕6点(14～19)、須恵器は甕の胴片1点であった。

坏は、口縁部がやや内湾気味のもの(５)・口縁部でわずかに外反するもの(６～７)・胴部近辺からラッパ状に外反するもの(８)・胴部から真っ直ぐに立ち上がるもの(９～10)に分類できる。底部が残存しているものは3点(５・６・11)で、いずれもヘラによる切り離しの後ナデ整形が施されている。５は口縁部径11.4cm・底経5.0cm・器高4.75cm。６は口縁部径11.4cm・底経4.9cm・器高4.4cm。７は口縁部径12.4cm。８は口縁部径14.0cm。９は口縁部径9.2cm。10は口縁部径13.8cm。11は底経6.6cm。

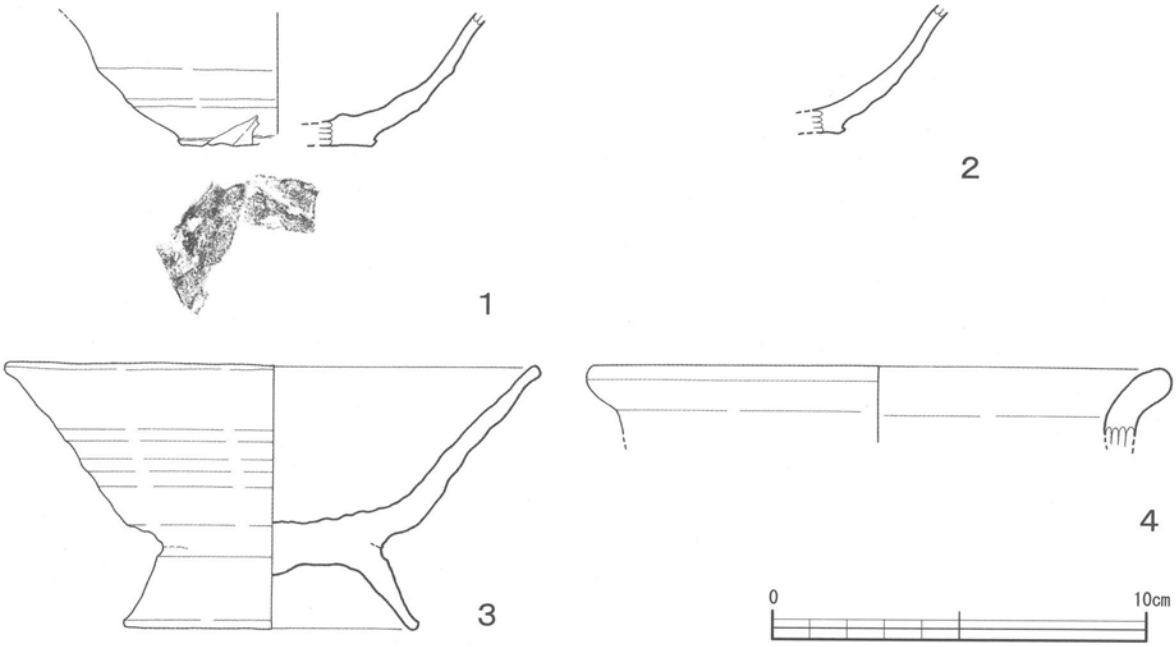
高台付椀は、12は高台が欠損しているが、13は完存している。12は胴部下半から口縁部まで真っ直ぐに立ち上がる。坏部底にはヘラ切り離しと思われる痕が残っていた。口縁部径は14.5cmだが、全体的に歪みが酷いため径が一定していない。13は胴部半ばがわずかに膨れ、



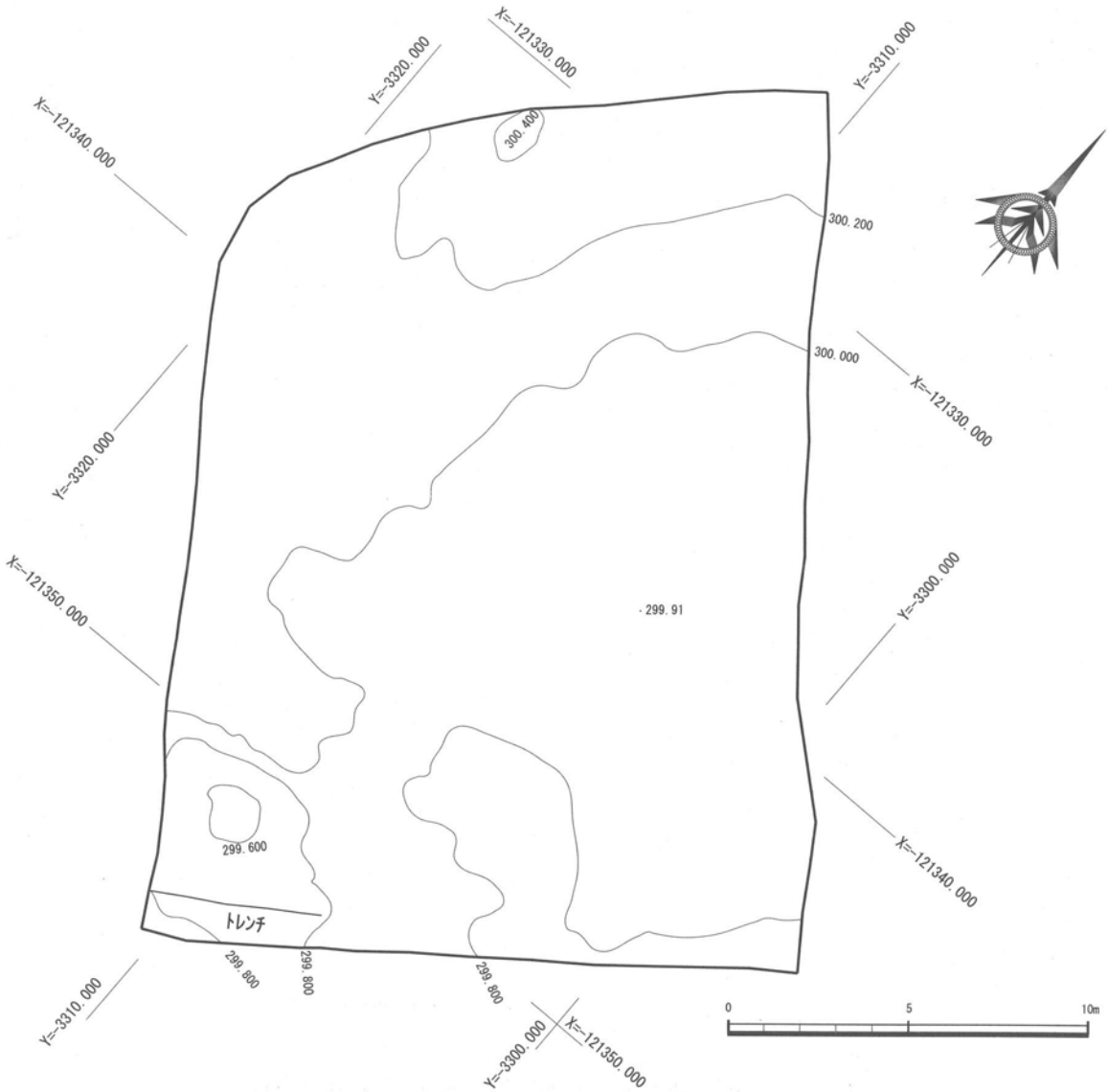
第31図　椨粉山遺跡Ｂ区第Ⅳ層上面地形図及び遺構図



第32図　椨粉山遺跡Ｂ区第Ⅳ層上面出土遺物分布図

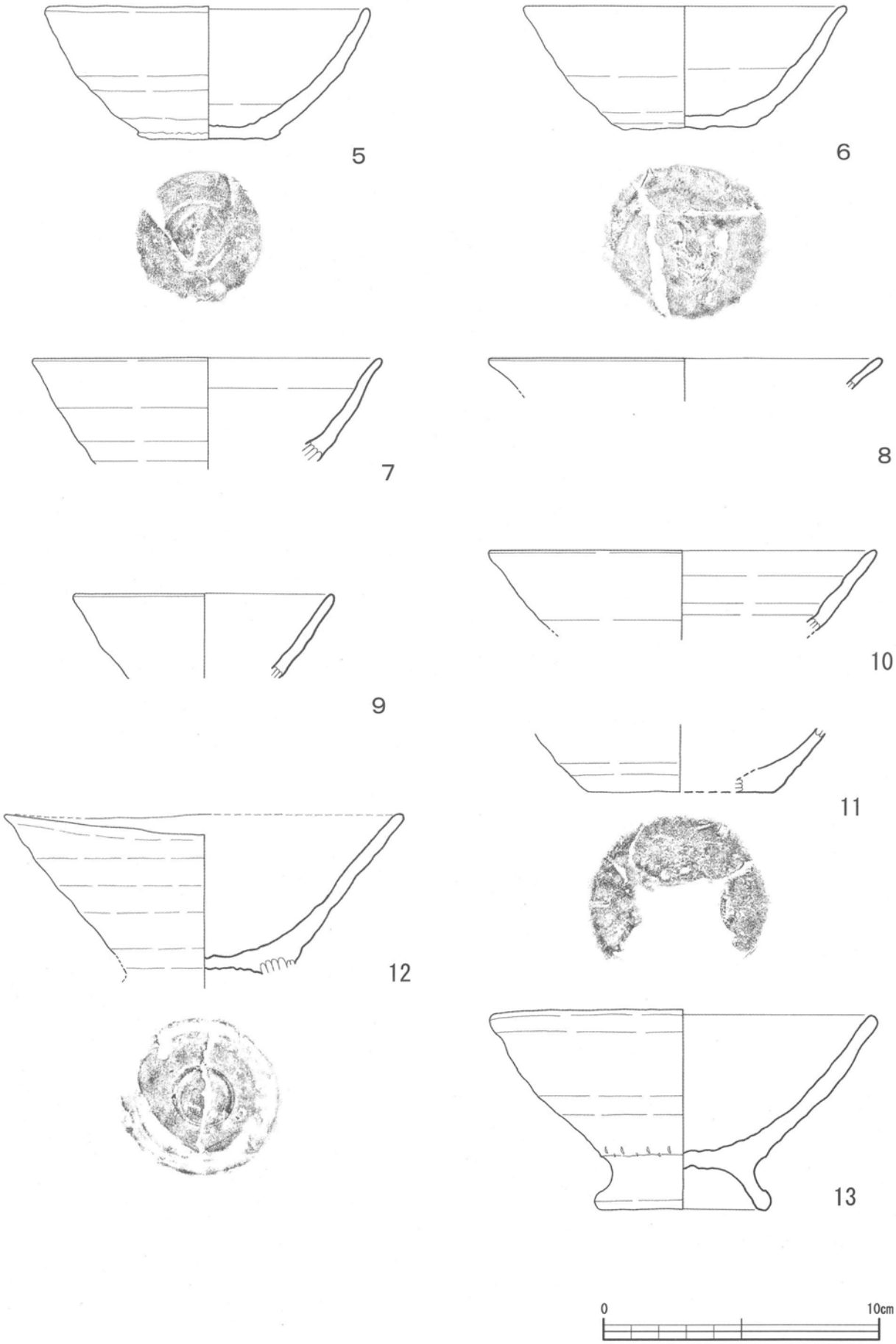


第33図　楙粉山遺跡Ｂ区第Ⅳ層上面出土遺物実測図

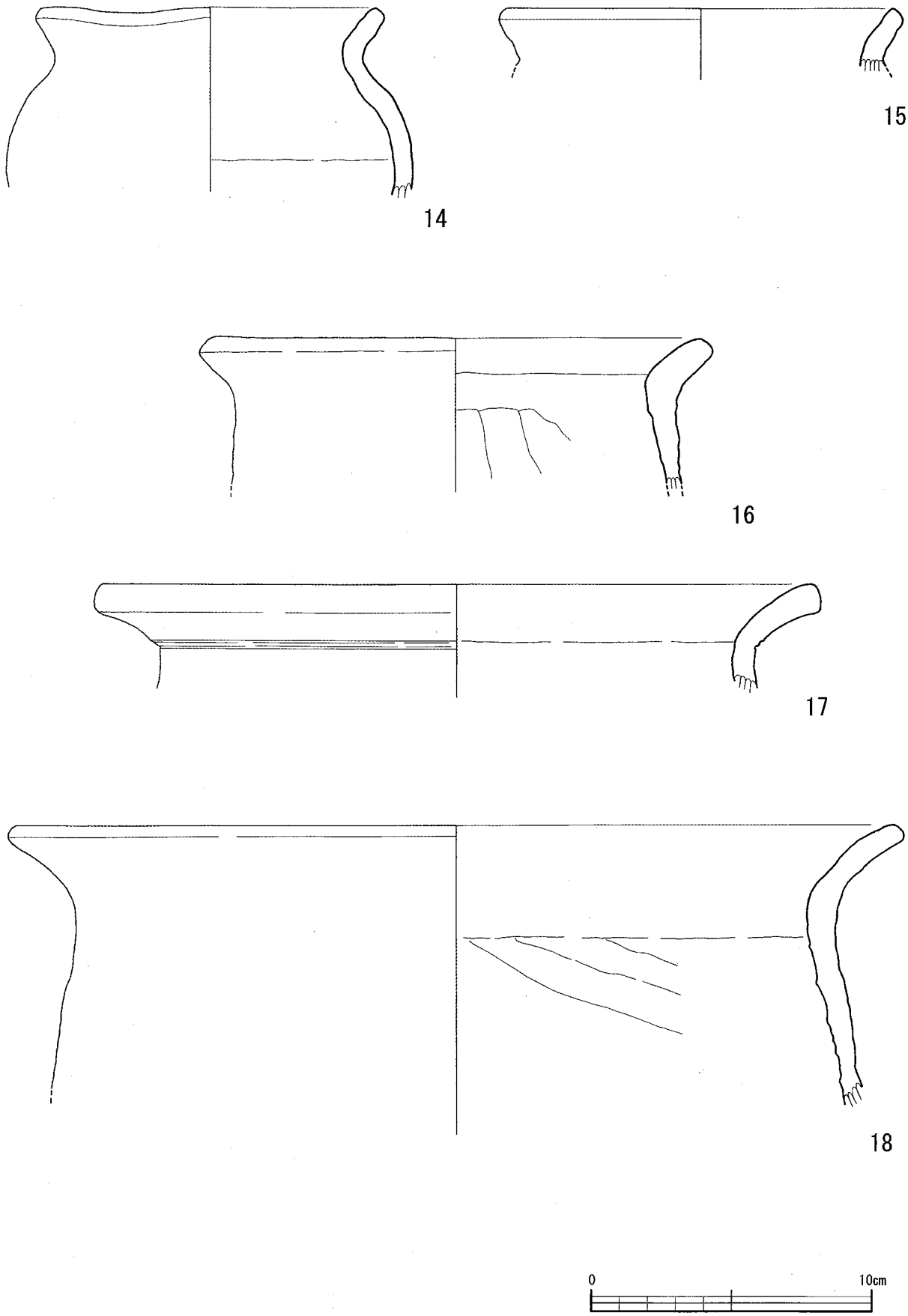


第34図　楙粉山遺跡Ｃ区第Ⅳ層上面地形図

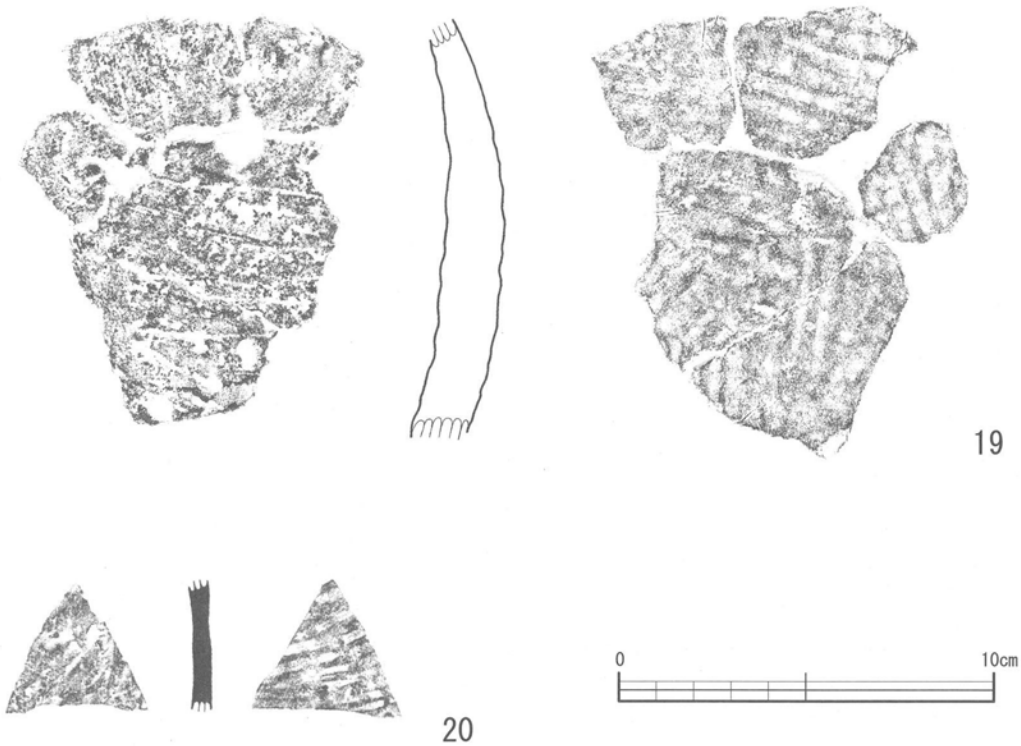
第35図　椨粉山遺跡Ｃ区第Ⅳ層上面出土遺物分布図



第36図　椨粉山遺跡Ｃ区第Ⅳ層上面出土遺物実測図（１）



第37図　椨粉山遺跡Ｃ区第Ⅳ層上面出土遺物実測図（２）



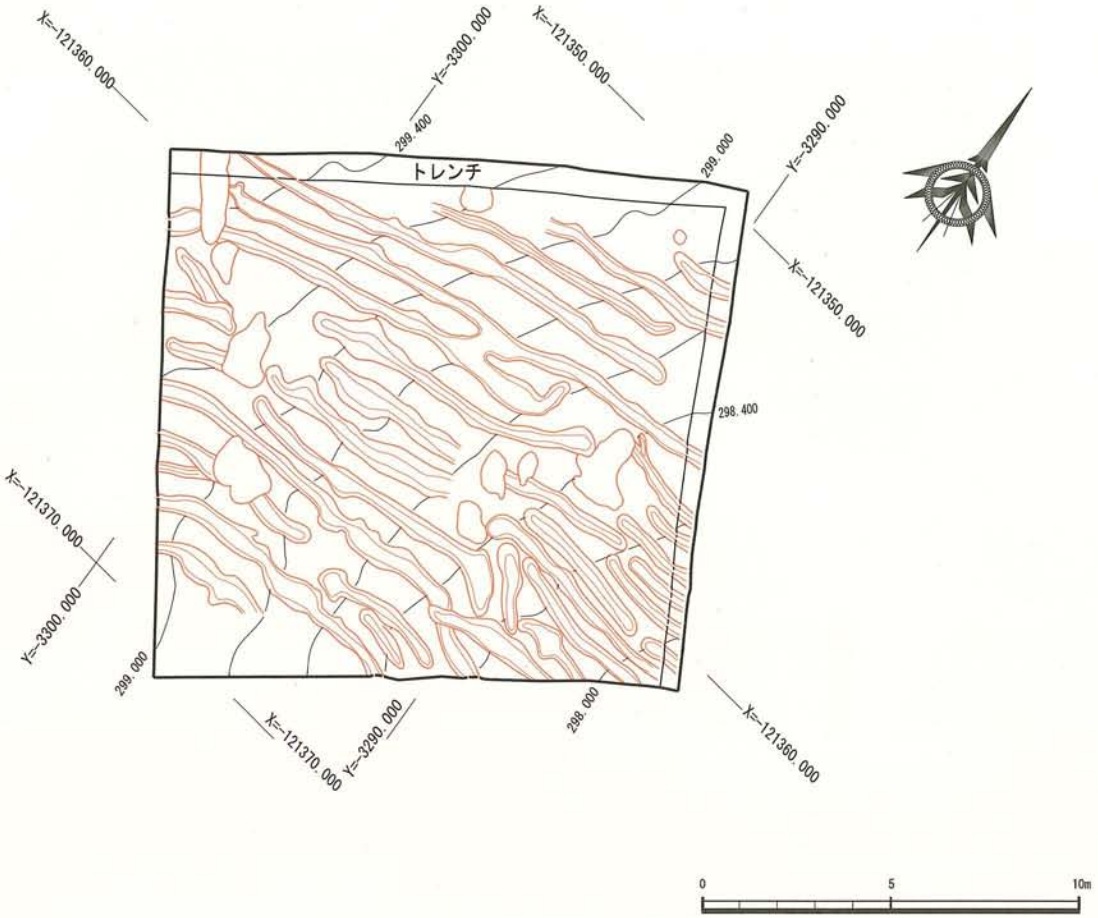
第38図　椨粉山遺跡Ｃ区第Ⅳ層上面出土遺物実測図（３）

口縁部で外反する。高台も端部で大きく外反する。坏身と高台の境目には整形痕と思われる爪形様の列点が見られた。口縁部径13.6cm・高台経6.0cm・器高7.2cm。

甕は完形に接合できるものがなかったので、口縁部を中心に掲載している。口縁部の形態は（１）ゆるやかに「く」字状に曲がるもの(14・15)、（２）外反の仕方は（１）に同じだが、頸部に明確な稜線を有する(16)、（３）口縁部が大きく頸部を中心に外反するもの(17・18)、の３種類に分類できる。又、口縁部径で見ると、（１）口縁部径が11～13cmのもの(14・15)、（２）約17cmのもの(16)、（３）25cmを超えるもの(17・18)、３種類に分類できる。口縁部の開き具合及び口径の相違により使用方法が異なるものと思われる。14は口径11.8cmで、内面は胴下半部のみヘラケズリを施す。15は口径13.6cm、頸部の稜線は見られない。16は口径17.4cm、頸部の稜線が明確で、稜線で横方向（？）のケズリを施した下に縦方向のヘラケズリを施す。17は口径25.0cm、頸部には薄いながらも稜線が見られる。対して器表面の頸部付近には調整の際にできたと思われる段差が見られる。18は遺跡中最も大きく、口径31.0cm、頸部のくびれよりもやや下側に稜線が見られ、その下に左上がりのヘラケズリを施す。19は土師器の甕の胴部断片であるが、器表面には、須恵器で見られる格子目状のタタキ痕が見られる。20が須恵器の断片である。器表面に格子目状のタタキ痕が見られる。

４　Ｄ区の出土遺構・遺物（第39図）

Ｄ区では、調査一面に畠の畝状遺構が検出された。いくつか蛇行するものの、大方は東西ライン上に主軸を置いている。遺構内の幅は約40～60cmとややばらつきがある。



第39図　椨粉山遺跡Ｄ区第Ⅳ層上面地形図及び遺構図

遺物については、全体的に少量で、土師器は甕の胴部小片１点のみであった。

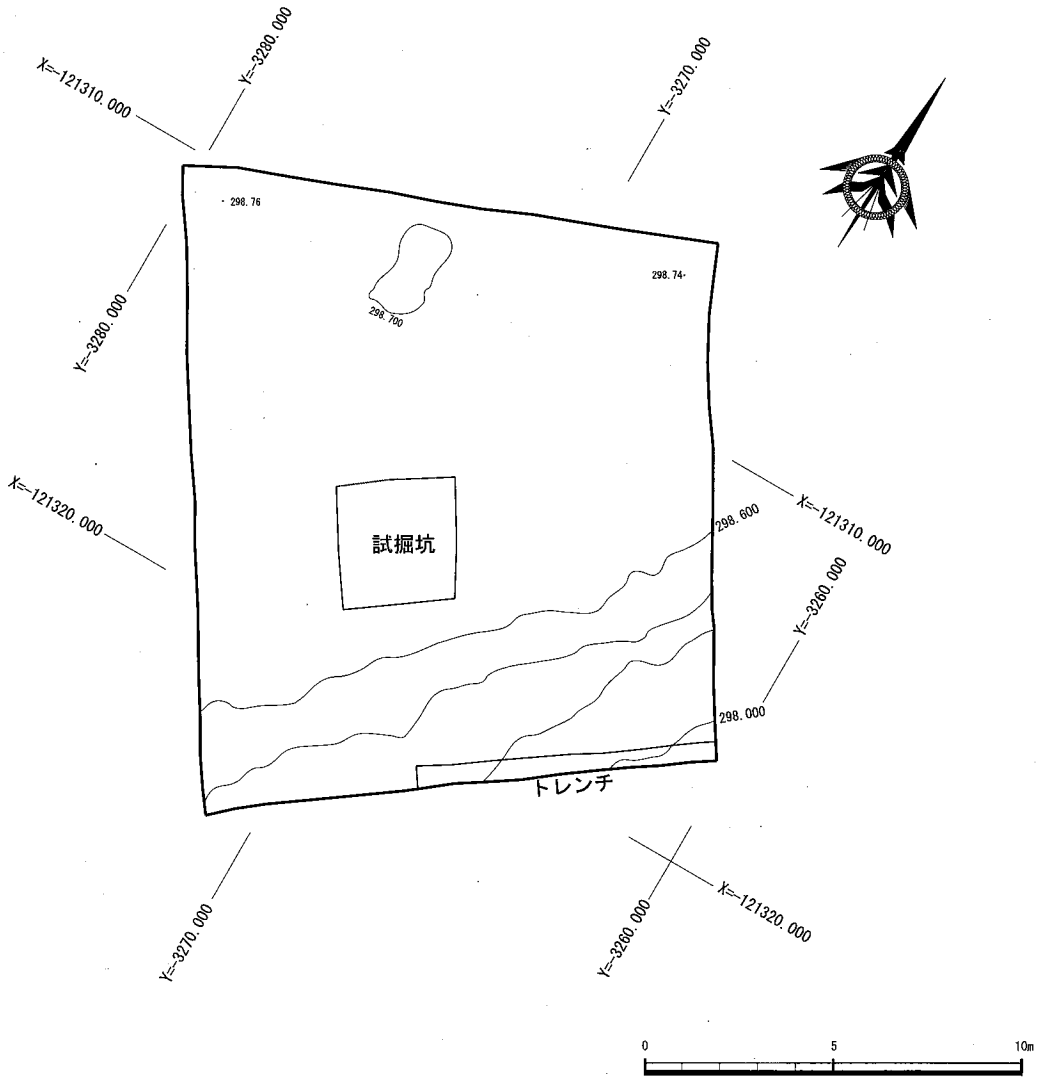
５　Ｅ区の出土遺構・遺物（第40図）

Ｅ区では、Ｃ区と同じように近年の削平による攪乱を受けており、同じく表土検出時より、縄文時代の土器及び石器が大量に出土した。土師器は少量見られたが、いずれも小片のみであった。

６　Ｆ区の出土遺構・遺物（第41～43図）

Ｆ区では、調査区一面に畠の畝状遺構が検出された。前記と同じく、いくつ蛇行するものの、その殆どが東西ラインに主軸を置いている。遺構内の幅は約40cmで統一されている。

遺物については土師器が多く出土したが、小片のため図化可能なものが少なかったが、そのうち３点を図化した（21～23）。21は高台付椀の高台部分である。比較的高く、真っ直ぐに立ち上がる。高台径7.2cm。22は口径26.2cm、頸部裏面には稜線は見られない。器表面の頸部付近にきつめのナデ調整による稜線が見られる。23は須恵器の甕断片で、器表面に格子目状



第40図　椨粉山遺跡Ｅ区第Ⅳ層上面地形図

のタタキ痕が見られる。

7　Ｇ区の出土遺構・遺物

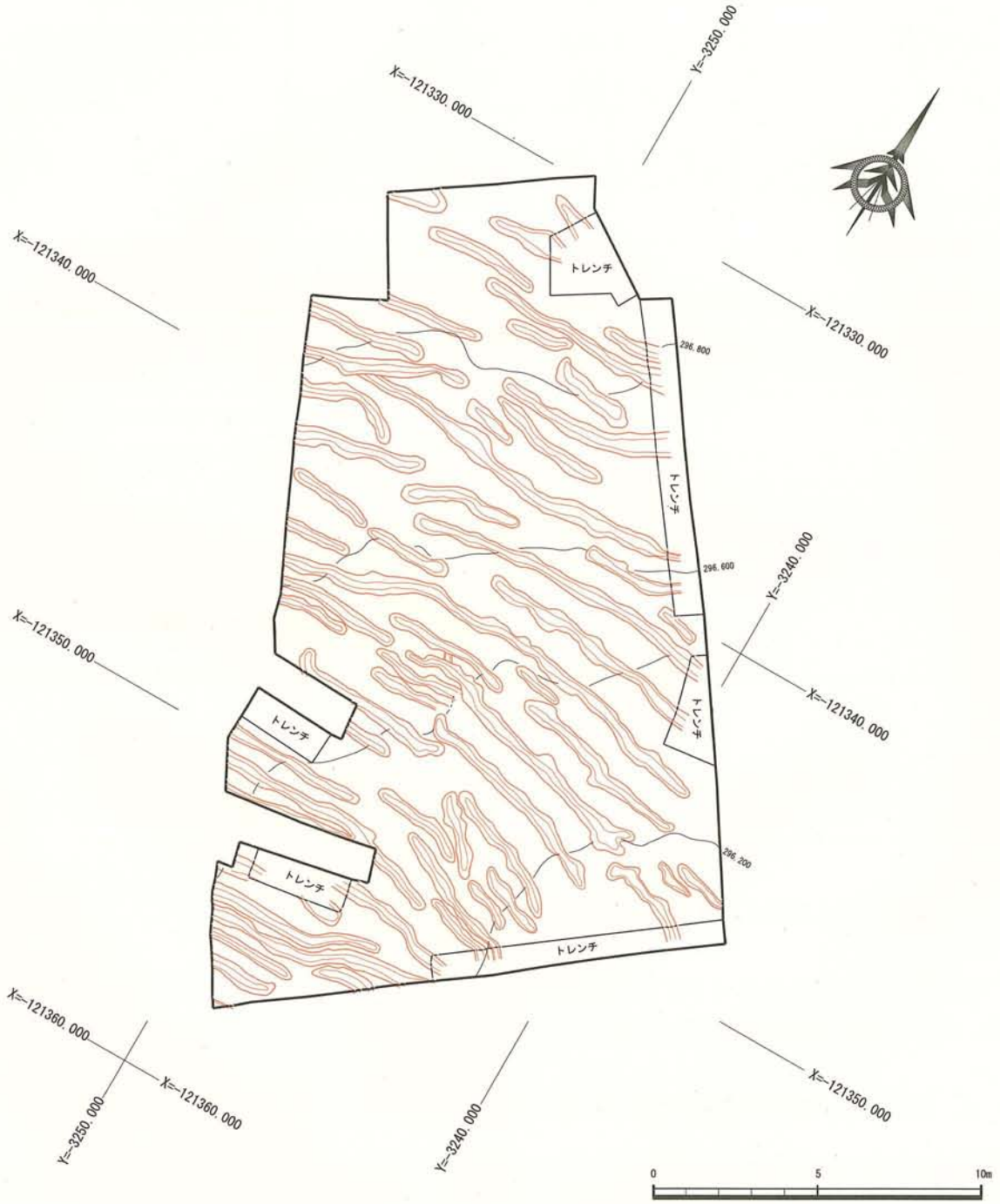
Ｇ区については、Ｇ１トレンチのみ第Ⅳ層まで掘削した。遺構掘削及び図下はしていないが、Ｈ区と同じ方向の畝状遺構が確認できた。

8　Ｈ区の出土遺構・遺物（第44～46図）

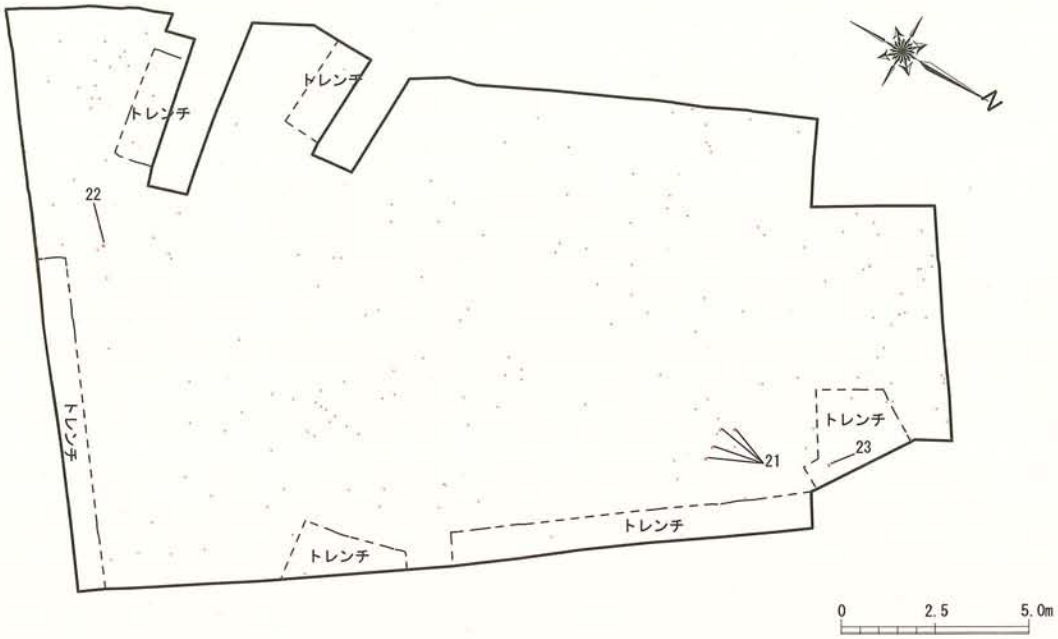
Ｈ区からも、削平されている南側を除いて、ほぼ一面で畝状遺構が検出された。遺構の殆どは北に流れる緩斜面に形成されている。あまり蛇行する事なくほぼ等間隔で並んでおり、北東－南西ラインに主軸を置いている。遺構内の幅は約40cmとほぼ統一されている。又、畝状遺構の南側には、調査区の中心を区切るように、東方向に下る事のできる道状の遺構と思

われる窪みが確認された。幅は約25cm。又、その南端にはⅢＥｃ層直下の状態で炭化木が検出された。さらに、北隅では、畝状遺構の斜面に段差を設け、テラスのような平地を造成しており、焼土等が見られた。

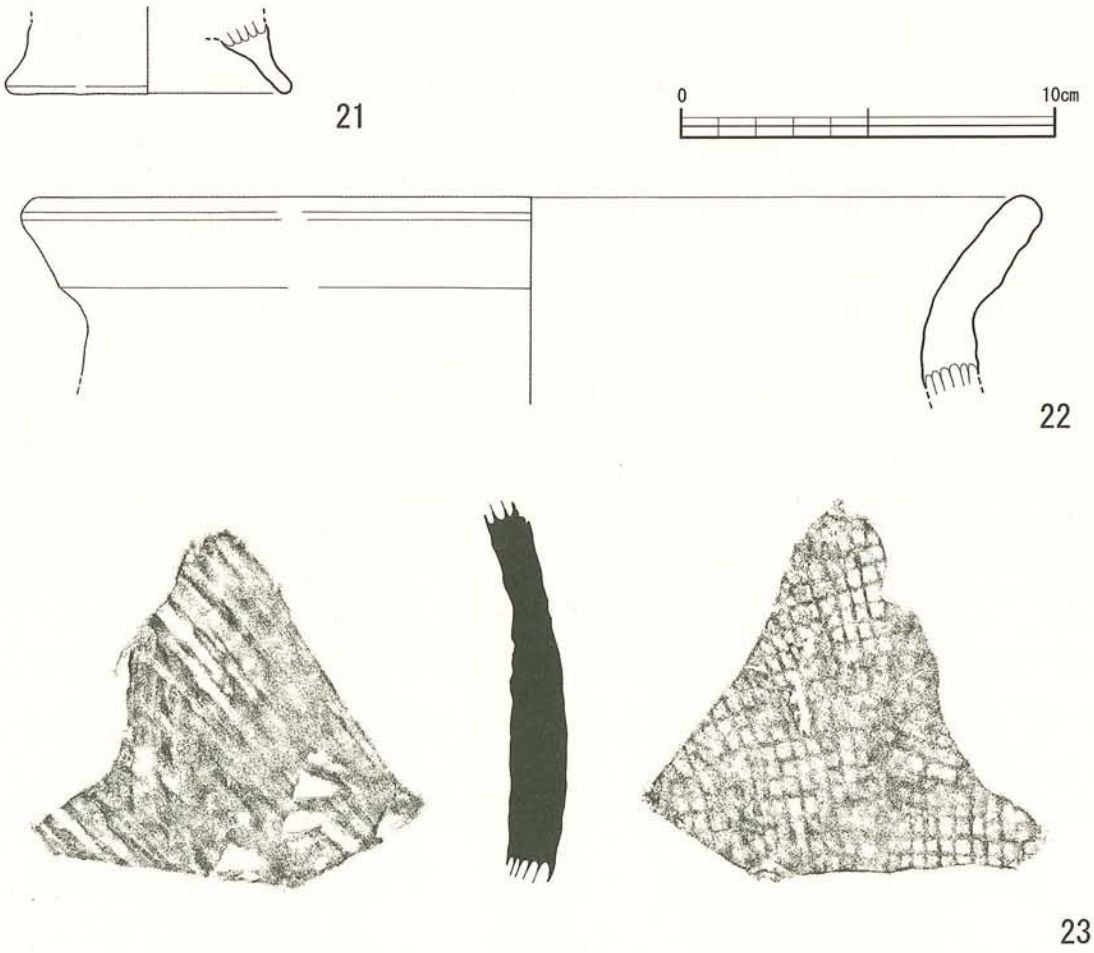
遺物については、調査区全体を通して土師器が多く出土したが、その全てが甕の口縁部及び胴部小片で、坏等は全く出土しなかった。又、須恵器が１点出土した(24)。壺の底部と思われる。底部径12.6cm。



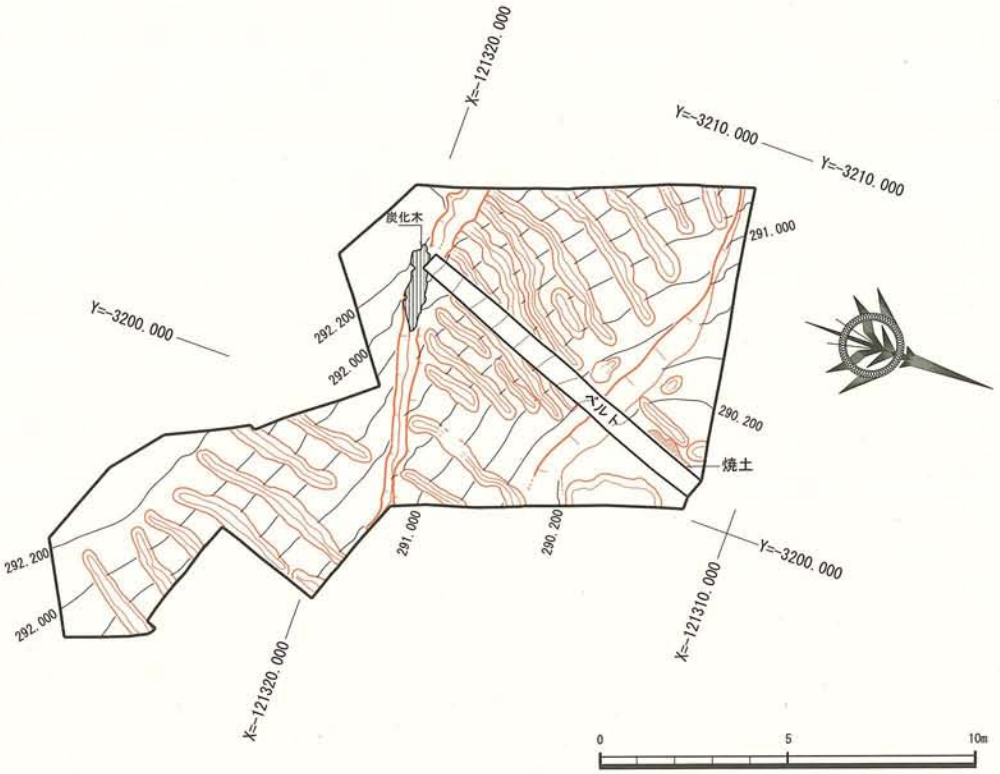
第41図　椨粉山遺跡Ｆ区第Ⅳ層上面地形図及び遺構図



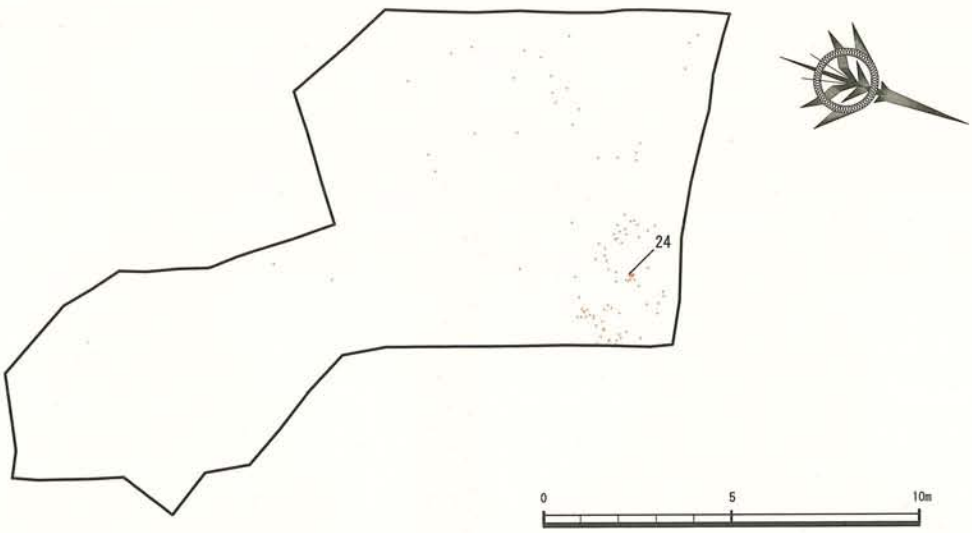
第42図　椨粉山遺跡Ｆ区第Ⅳ層上面出土遺物分布図



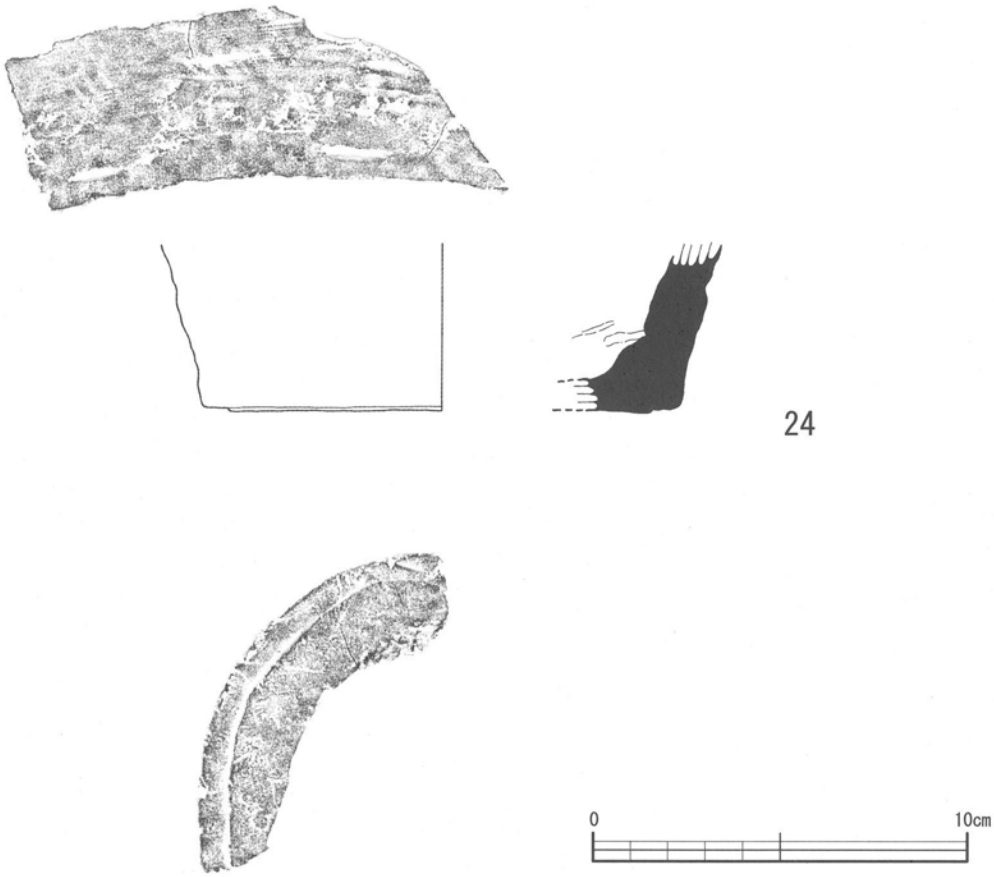
第43図　椨粉山遺跡Ｆ区第Ⅳ層上面出土遺物実測図



第44図　椨粉山遺跡Ｈ区第Ⅳ層上面地形図及び遺構図



第45図　椨粉山遺跡Ｈ区第Ⅳ層上面出土遺物分布図



第46図　椨粉山遺跡Ｈ区第Ⅳ層上面出土遺物実測図

表１　　椨粉山遺跡出土遺物観察表

挿図番号	出土区	種別	器種	色調		調整			胎土	焼成
				外面	内面	外面	内面	底部		
1	B2区	土師器	坏	橙 (Hue7.5YR6/6)	灰 (Hue7.5Y5/1)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	精良	良
2	B2区	土師器	坏	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	精良	良
3	B2区	土師器	高台付椀	橙 (Hue5YR7/8)	浅黄橙 (Hue7.5YR8/6)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	精良	良
4	B2区	土師器	甕	にぶい黄橙 (Hue10YR6/4)	橙 (Hue7.5YR6/6)	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	径1mmの黄灰色砂粒を多く含む	良
5	C区	土師器	坏	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4) 褐灰 (Hue7.5YR4/1)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	径1mmの黄灰色砂粒を少量含む	良
6	C区	土師器	坏	にぶい橙 (Hue7.5YR6/6)	橙 (Hue7.5YR6/6)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り ナデ	精良	良
7	C区	土師器	坏	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	にぶい橙 (Hue7.5YR7/4)	ヨコナデ	ヨコナデ		径1mmの透明砂粒を多く含む	良
8	C区	土師器	坏	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	ヨコナデ	ヨコナデ		精良	良
9	C区	土師器	坏	橙 (Hue7.5YR7/6)	橙 (Hue7.5YR7/6)	ヨコナデ	ヨコナデ		精良	良
10	C区	土師器	坏	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR6/3)	ヨコナデ	ヨコナデ		径2mmの黒色砂粒を少量含む	良
11	C区	土師器	坏	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	にぶい黄橙 (Hue10YR7/4)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り ナデ	精良	良
12	C区	土師器	高台付椀	橙 (Hue5YR7/6)	橙 (Hue7.5YR7/6)	ヨコナデ	ヨコナデ		精良	良
13	C区	土師器	高台付椀	灰白 (Hue10YR8/2) 橙 (Hue2.5YR6/6)	明黄褐 (Hue10YR7/6) 灰白 (Hue10YR7/1)	ヨコナデ	ナデ (一部ミガキ)		精良	良
14	C区	土師器	甕	にぶい黄橙 (Hue10YR6/4)	橙 (Hue5YR6/6)	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ		径1mmの灰色砂粒を多く含む	良
15	C区	土師器	甕	にぶい橙 (Hue5YR6/4)	にぶい橙 (Hue7.5YR6/4)	ヨコナデ	ヨコナデ		径1mmの黒色砂粒・黄褐色砂粒を多く含む	良
16	C区	土師器	甕	橙 (Hue5YR6/6)	橙 (Hue5YR7/6)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ		径0.5～1mmの透明砂粒を多く含む	良
17	C区	土師器	甕	橙 (Hue7.5YR6/6)	橙 (Hue7.5YR6/6)	ヨコナデ	ヨコナデ		径1mmの赤褐色砂粒を多く含む	良
18	C区	土師器	甕	にぶい黄橙 (Hue10YR6/3) 褐灰 (Hue10YR4/1)	にぶい橙 (Hue7.5YR6/4) 橙 (Hue7.5YR6/6)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ		径1mmの灰・橙色砂粒を少量、径1mm前後の透明砂粒を多く含む	良
19	C区	土師器	甕	橙 (Hue7.5YR7/6)	橙 (Hue5YR6/6)	タタキ	ヘラケズリ		径2mm前後の黄灰色・透明砂粒を多く含む	良
20	C区	須恵器	甕	にぶい赤褐 (Hue2.5YR5/4)	灰 (Hue7.5Y5/1)	タタキ	タタキ？		径0.5～1mmの黄灰色砂粒を多く含む	良
21	F区	土師器	高台付椀	淡黄 (Hue2.5Y8/3)	淡黄 (Hue2.5Y8/3)	ヨコナデ	ヨコナデ		精良	良
22	F区	土師器	甕	橙 (Hue7.5YR7/6)	橙 (Hue7.5YR7/6)	ヨコナデ	ヨコナデ		径5～7mmの赤褐色砂粒を少量含む	良
23	F区	須恵器	甕	橙 (Hue5YR6/6)	灰黄 (Hue2.5Y7/2)	タタキ	タタキ		精良	良
24	H区	須恵器	壺	暗青灰 (10BG4/1) にぶい橙 (Hue7.5YR6/4)	にぶい橙 (Hue7.5YR6/4)	ヘラケズリ タタキ	ヨコナデ		径0.5～1mmの黄灰色砂粒を多く含む	良？

第Ⅳ章　　ま　と　め

第１節　陥し穴遺構について

１．はじめに

今回発掘調査を実施した椨粉山遺跡からは、狩猟用の陥し穴遺構が計15基検出された。時期については、①埋土が高原スコリアのみの遺構と高原スコリア上層の土が混入している遺構の2種ある、②陥し穴内の逆茂木に新旧が見られる、事から、単純に考えれば高原スコリア降下前と降下後の２時期に形成された可能性が高い。高原スコリアの降下年代が不明ながらも、中世の遺構であると確定できる。通常、陥し穴が検出される場合、旧石器あるいは縄文時代のものが大半で、中世の出土例は殆ど見られない。高原町は、霧島山系に近いところに位置しており、又、他の市町村に較べて中近世の土層が良好に残る事が多いため、前述の陥し穴遺構も度々検出される。以下、その類例を追ってみる。

２．中世陥し穴遺構の類例

（１）荒迫遺跡(1)

荒迫遺跡は椨粉山遺跡の北東5km、高原町大字広原字荒迫に位置する。遺跡の中心に位置するＢ１地区から陥し穴遺構が２基検出された。２基とも土坑内部や逆茂木内に高原スコリアが混入している。

（２）大鹿倉遺跡群(2)

大鹿倉遺跡群は椨粉山遺跡の北東約3.2km付近に位置する遺跡である。平成9年度から試掘及び本掘調査が実施されたが、弥生時代から古代までの遺物が幅広く出土した。その中で陥し穴遺構が5～6基検出されている。形態としては、椨粉山遺跡のものと同様で、逆茂木内には高原スコリアと炭化物が確認されている。正式な報告書が未刊行なため詳細は不明である。

（３）中ノ原遺跡(3)

西臼杵郡高千穂町の中ノ原遺跡では、陥し穴遺構が4基検出されている。いずれもアカホヤ火山灰層（Ⅵ層）の上層（Ⅴ層）で確認されており、さらにその上層（Ⅲ～Ⅳ層）は縄文土器から陶磁器まで幅広く出土する遺物包含層が形成されている。時期については、アカホヤ降灰以降としか言及できない状況であったが、形状的には椨粉山遺跡のものと非常によく似ている。

なお、中ノ原遺跡の報告書では、天神河内第１遺跡で出土した土坑も陥し穴と捉えているが、今回は「逆茂木のあるもの」を中心にしているため省略した。

（４）上野原遺跡(4)

東臼杵郡東郷町の上野原遺跡では、弥生時代の陥し穴遺構の他、時期不明の陥し穴状遺構が14基検出されている。このうち、時期不明とされている陥し穴については、平面プランは弥生時代のもののような楕円形ではなく、長方形を呈しており、大きさは約1.5×0.4m。底部には2～6本の逆茂木が不規則に並んでいる。

（５）その他の類例

続いて全国に目を向けると、長野県では、泉村の南平遺跡やあきほ沢遺跡などで中世の陥

し穴遺構が検出されている(5)。詳細は不明だが、円形・長方形の２種類あり、このうち長方形の遺構は、長軸3～4m・短軸1～1.5m・深さ1.5mと、椨粉山遺跡の遺構に較べて、かなり大型の遺構である。又、短軸の断面が逆フラスコ形というのも特異な部分である。

時代はこれよりもやや古くなるが、栃木県茂木市の登谷遺跡では、縄文時代草創期から平安時代までの幅広い時期の陥し穴が230基検出されている。陥し穴は円形・楕円形・溝形の３種類あり、このうち、平安時代に造られた陥し穴は円形で数は最も少なく、尾根の平坦部を囲う形で設置されている(6)。

このように、中世の陥し穴については、急増とまではいかないものの、確実に事例は増加している事がわかる。ただし、これには、やはり中世の遺構と確定できるだけの層序の残存などが条件であるが、これを踏まえれば、椨粉山遺跡の場合、高原スコリアの降下年代が不明という事を差し引いても、確実に中世の遺構と判断できる好材料ではないだろうか。

３．逆茂木の状況について

具体的な時期について触れるが、埋土及び逆茂木の状況から、おおまかには２時期あった事がわかる。今回の調査区のうち、Ｆ区のＳＣ１３が明確に２時期に分ける事が出来る。ＳＣ１３は土坑の底から2本1組、計10本の逆茂木が検出された。逆茂木内の埋土には、①高原スコリアが隙間なく詰まったもの、②逆茂木縁辺部に炭化物が残存し、有機物が土壌化したもの、の2種に分かれる。そして①が造られた跡に①の上部に重複するように②が造られる、といった事がわかる。又、土坑の埋土に高原スコリアの上層で検出される灰色火山灰（ＩＦ層）が検出されている事から推測すると、高原スコリア降下前と降下後の２時期に分かれる事が推測できる。

②の炭化物について、Ｂ１区ＳＣ３の逆茂木内に残存していた炭化物を分析したところ、16世紀半ばから17世紀半ばという非常に幅広い年代が得られた。その他、埋土の状況などを考慮すると、第１回目の使用は高原スコリア降下直前として、廃絶後の再利用の年代は大体16世紀半ばと考えて良いのではないだろうか。

なお、逆茂木に使われた材木についてであるが、残存状況が非常に悪いため、分析では広葉樹という判断にとどまった。この他にも別の陥し穴から炭化物が出土しており、それらを観察すると、多くは通常見られる炭化木よりも薄く、布のように繊維も非常に細かいように見受けられる。又、埋土掘削中から常に縁辺部のみに炭化物が見られ、中心部分は常に空洞であった事から、今のところは、竹状のものと推定している。いずれにしろ、資料が絶対的に不足しているので、今後の検出事例が期待される。

※陥し穴の実測図でのＩＦ層の埋土注記について、遺構毎に土色が変化しているが、実際は明確に一層を形成しているわけではなく、上下の土層に混ざり合う形で検出されるためである。

４．陥し穴の作成方法及び設置方法

次に作成方法であるが、ＳＣ９・１５の壁面には手斧と思われる工具痕が見られる。幅は10.6～15.0cmの方頭であった。方頭の工具痕が見られるのは、遺構の短辺の壁面に限られて

いるのに対し、長辺側には上弦形の工具痕が見られた。短辺は大まかには人間の腰幅よりもやや広めに造られている事から、長軸方向に併せて掘削した事がわかる。遺構底部は、一部の遺構で埋土掘削中に掘りすぎてしまった部分もあるが、大方は短辺側の底はあまり面取りはされておらず、全体的に中心部分が少し深くなるような形であったと思われる。

次に陥し穴の設置についてだが、当初陥し穴が検出された折りは、等高線に沿うような形で検出されるものと想定していたが、実際はかなりバラバラな状態で検出された。調査区が狭いために旧地形における陥し穴の設置基準というものは明確には判断できないが、大方は尾根の方向に意識的に合わせていると思われる。

第２節　畝状遺構について

１．遺構の概要

今回の調査では、面積も狭く、様々な制約を受けた調査であったが、計４区で古代の畝状遺構を検出する事が出来た。いずれも第Ⅳ層上面で検出しているが、Ｂ２・Ｄ・Ｆ区の場合は土層断面を見る限り、それよりも１層上のⅢＦ層で形成された可能性が高い。埋土についてもほぼ共通している。しかし、Ｈ区の南東側のみ、ⅢＥａ層のみで埋土が構成されていた。つまり、ⅢＥａ層を除去している最中に畝がそのまま出現したような状態であった。Ｈ区は他の調査区に較べて斜度がややきついので、こういう現象が起こったものと思われる。

２．栽培作物について

次に栽培作物についてであるが、畝状遺構が検出された全ての調査区において分析を実施したところ、イネ科栽培植物の痕跡がわずかながらも検出されたのはＢ２区のみである。その他のＤ・Ｆ・Ｈ区においては、いずれもそういった痕跡は認められなかった。現状の段階では、根菜類と推定するしかない。ただ、ススキなども同時に大量に検出されており、計画的な栽培であったかは、甚だ疑問である。

３．遺構の年代

次に遺構の年代であるが、Ｈ区の畝状遺構上面で確認された炭化木について、西暦1000年という結果が出た。畠もこの時期に近い事は推定されるが、炭化木そのものが直接畠に関係するものかは今回の調査では判断できなかった。ただ、炭化木及びＨ区南東部の埋土を考えると、この年代に近い時期ではないだろうか。

第３節　調査区出土の土師器・須恵器について

今回の発掘調査では、古代の土器が800点程出土しているが、多くは細片で、しかも割れ口

が摩滅しているものも多かった。又、遺構からの出土は、流れ込みの可能性が高いものの、Ｂ２区の３のみである。具体的な編年とまではいかないが、今回出土した土器について、若干の特徴を挙げておく。

まず、器種構成であるが、土師器は坏・高台付椀・黒色土器Ａ類・甕のみである。

器種構成の大きな特徴として挙げられるのが、円盤高台土器が全く出土していない事である。円盤高台土器は南九州の古代の遺跡から幅広く出土する土器で、坏底部に台形状あるいは円盤状・柱状の高台が付いている。宮崎・鹿児島県が主な出土中心地であるが、遠くは福岡県の太宰府条坊跡でも出土しており、「異種土師器椀」と位置付けられている(7)。宮崎県でも小山尻東遺跡(8)をはじめ、高岡町の蕨野遺跡(9)・三生江遺跡(10)・佐土原町の平田迫遺跡(11)・都城市の大島畠田遺跡(12)など、近年の発掘調査事例の増加により、出土例が急増している。

続いて椨粉山遺跡の近隣の遺跡を見てみると、同町の荒迫遺跡・立山遺跡の他、小林市の梅木原遺跡(13)でも出土しているが、県内の状況から見ると、まだその数は少ない。

円盤高台土器の時期については9世紀後半から10世紀前半という非常に限られた時期に盛行しており、古代の土師器の年代を推定する上で、有力な資料となっている。

次に黒色土器Ａ類については、通常のように真っ黒に燻されているものは出土せず、多くはやや灰色で器裏面に粗雑な磨きをかけたものが主体である。又、坏などについても、その殆どが成形時と思われるに歪みのあるものが殆どで、技術の稚拙さを覚える。

次に坏の底部調整手法であるが、出土した底部片については、全てヘラ切り離し痕のみが見られ、糸切り離し痕は全く見られなかった。又、高台付椀については、県内の小山尻東・蕨野・三生江遺跡出土土師器に見られるような、在地手法といわれている坏身底部外面の放射状指頭調整痕(14)については、全く見られなかった。

次に個別の土器を検討するが、今回出土した土器の中で特徴的なのは、３・13であろう。３は、底部径の広い坏身下半部にやや膨らみを持ち、口縁部端でわずかに外反する。際立つのは高台の高さであろう。端部にややひねりが加わり、断面の細長い。又、13は底部径が小さい坏身が真っ直ぐに伸び、口縁部でかまぼこ状に膨らみながら外反する。

今回の調査の場合、具体的に遺構から出土したわけでなく、全てが包含層出土のため、明確な時期決定はできなかった。Ｈ区の炭化木の年代を考えた場合、ある程度はこれに近い時期ではないだろうか。

第４節　各火山灰の降下年代について

前述のように各遺構についての時期等を考察したが、いずれも年代不明の火山灰が絡んでいるため、明確な時期には言及できないのが現状である。そこで、椨粉山遺跡で確認された各火山灰について考察する。

なお、一連の火山灰に該当するような年代を『日本噴火志』(15)で霧島山の噴火をあたったところ、天平14(742)・延暦7(788)・天慶8(945)・天永3(1112)・仁安2(1167)・寿永2(1183)・文暦1(1234)・大永4(1522)・天文23(1554)、の年代が出てきた。

1．霧島大谷４～６テフラ（高原スコリア）

まず、高原スコリアの年代であるが、これまでは、文献などから推定した結果、延暦7年(788)に降下したものと言われていたが、立山遺跡・大谷遺跡・荒迫遺跡等の調査によって、高原スコリアよりも下層で9世紀後半から10世紀前半にかけての土師器や須恵器が出土する事が判明した。このうち、荒迫遺跡の調査成果から、高原スコリアの降下時期については、天永3年(1112)・仁和2年(1157)・寿永2年(1183)の複数回降下と推定された(16)。しかし資料不足は否めず、現在のところは10世紀から13世紀にかけて複数回降下したというところに落ち着いている。又、宮崎市の前田遺跡(17)などでは、文明3年(1471)降下と推定される桜島火山灰が高原スコリアの上層にある(18)事から、高原スコリアは、少なくとも15世紀半ばを下限としている事がわかる。

今回も、高原スコリア直下面で炭化物が検出されたが、いずれも直接効果年代に繋がるものはなかった。

次に文献から推定してみよう。旧高原郷に所在した神徳院（狭野権現社の別当寺）及び錫杖院（霧島東御在所両所権現社の別当寺）等に残存している、近世期に作成された神社の由来書が複数存在するが、そこでは、これらの寺院は10世紀末頃より発展し始めたが、おしなべて文暦元年(1234)の霧島山の噴火により廃絶した事を記している。そう考えた場合、高原スコリア降下年代については、文暦元年に近い年代ではないだろうか。

2．霧島大谷１～３テフラ

霧島大谷１～３テフラについてであるが、この火山灰に関しては、高原スコリアのように広範囲で確認されているわけでなく、ほぼ高原町内の山側でのみしか確認されないため、高原町内で実施された発掘調査の成果しか使えないという制約がある。しかしながら、椨粉山遺跡では、若干の炭化物が確認された。今のところ、それを有効な資料として扱わざるを得ない。

今回の調査では、Ｂ１区のトレンチ内において、土壌分析及びⅢＥｂ層に含まれていた炭化木について分析を実施した。又、Ｈ区では、ⅢＥｂ層直下で炭化木が確認された。放射性炭素分析を実施したところ、西暦1000年という数値が出された。しかし、上記の噴火年代にそれと近いものは見られない。ということは、文献でも拾い切れていない噴火年代が存在するという事になる。

なお、この火山灰については、平成14年度に高原町で調査された宇津木遺跡でも同様に炭化木が検出されているので、その成果を以て判断したい。

高原町では、町単独で発掘調査を実施したのは今回が初めてである。よって、文化財保護部局・開発部局双方共に手探りの状態で進んだような状態であった。その結果、遺跡の面積の割に調査面積が狭いという事態を招いてしまい、調査結果については、従来から問題視されていた高原スコリアの年代や、古代の畝状遺構の年代・栽培作物等、有力な情報を引き出す事ができなかった。筆者としても、高原町に赴任して初の大きな発掘調査であったため、

今から考えると、非常に稚拙な調査であった事を痛感する次第である。このような状況にも関わらず、調査に協力してくださった地権者並びに狭野土地改良区の方々・町農村整備課ほか各関係機関に改めて御礼申し上げたい。

【参考文献】

(1)和田理啓・久木田浩子　1998「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集
(2)宮崎県埋蔵文化財センターの南正覚雅士氏のご教示による。
(3)谷口武範　他　1999「中ノ原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第17集
(4)太川裕晴　2003「上野原遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第6集　東郷町教委
(5)芹澤義夫編集　1998「月刊文化財発掘出土情報 1998.3　株式会社ジャパン通信情報センター
(6)芹澤義夫編集　2002「月刊文化財発掘出土情報 2002.12　株式会社ジャパン通信情報センター
(7)中島恒次郎・城戸康利　1994「薩摩国から来た食器ー太宰府条坊跡　第89次調査出土資料ー」『中近世土器の基礎研究Ｘ』日本中世土器研究会
(8)長津宗重・近藤協　1985「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集
(9)島田正浩　1994「蕨野遺跡」『高岡町埋蔵文化財調査報告書』第6集　高岡町教委
(10)島田正浩　2001「三生江遺跡」『高岡町埋蔵文化財調査報告書』第21集　高岡町教委
(11)川崎辰巳　2000「平田迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第29集
(12)谷口武範　2000「大島畠田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第28集
(13)工藤基志　2000「梅木原遺跡」『小林市文化財調査報告書』第11集　小林市教委
(14)岡本武憲　1995「九州南部」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
出合宏光　1994「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究ＸＶ』日本中世土器研究会
(15)震災予防調査会編　1982『日本噴火志』五月書房
(16)文献(1)に同じ
(17)東憲章　1998「前田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第9集
(18)これに関連して、古環境研究所の堀口譲氏より、宮崎市近辺で検出される高原スコリアは、高原町で検出される高原スコリアの最上層に相当するのでは、との指摘を受けた。